

# 平成 29 年度 墳丘外表面調査の成果報告—宇和奈辺陵墓参考地—

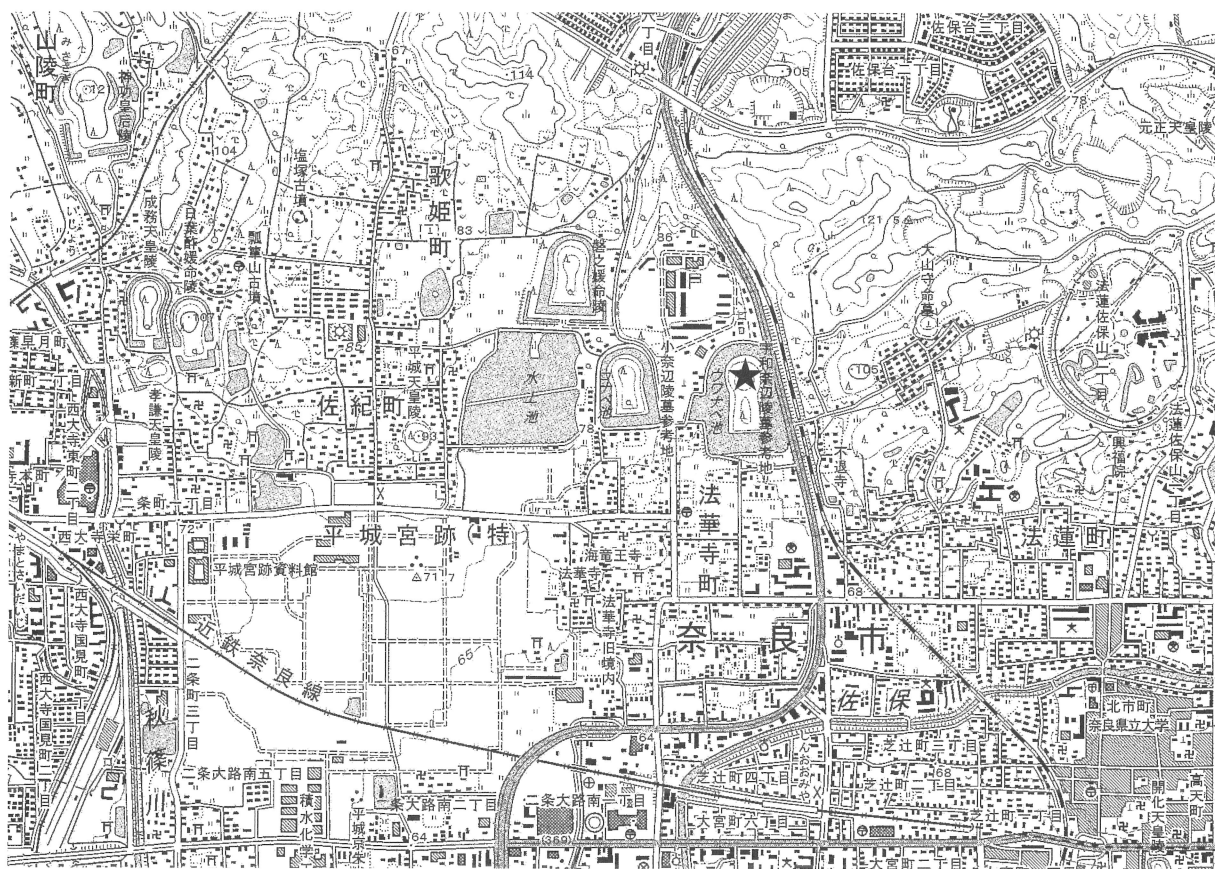
## はじめに

陵墓において書陵部陵墓課が行う調査には、事前調査や立会調査など埋蔵文化財の確認を伴うもののほかに、主に墳丘の精細な測量図を作成して現況を記録する墳丘外形調査などがある。いずれも、陵墓の保全・管理に必要なデータを取得するための考古学的調査である。その中でも、平成 28 年度に開始した墳丘外表面調査は踏査を中心としたものであるが、調査形態として当庁のみで実施するものではなく、陵墓の保全・管理をより強化するために、新たに地元自治体や外部研究者の協力を得ながら行うものである。初めての実施となったのは百舌鳥・古市古墳群内に所在する陵墓 3 箇所についてであり、その調査結果については、本誌第 69 号において報告を行ったところである。

平成 29 年度は、28 年度に引き続き墳丘を陵墓として宮内庁が管理を行い、周濠部分が自治体等の管理になる宇和奈辺陵墓参考地を調査対象とした（第 25 図）。同参考地は濠幅が広く、墳丘裾が絶えず周濠の波浪にさらされている状態にあるが、護岸工事が未実施であるためにその保全については喫緊の課題であり、将来的な工事の必要性からも墳丘外表面調査の目的と合致することから、対象として選定したものである。

以下に、本調査の成果について報告を行いたい。墳丘の所見のほか、採集した埴輪があるのでそれらについても報告する。また、平成 25 年に濠水の波浪により前方部前面東隅が一部崩落した際に、埴輪と須恵器が転落したため採集していたものがある。これらについても、この機会にあわせて報告することとする。

なお、踏査による地表面の所見であるため、将来的に墳丘裾護岸工事に先立つ事前調査が実施された場合は、その結果しだいで所見が変更される可能性があることを付言しておきたい。（清喜裕二）



作図にあたっては、国土地理院発行の 1/25,000 地形図「奈良」を使用  
★印が宇和奈辺陵墓参考地

第 25 図 宇和奈辺陵墓参考地 位置図 (1/25,000)

# 1 調査に至る経緯と調査の経過

## (1) 調査に至る経緯

同参考地は、長さ約 260 m を測る 3 段築成の前方後円墳である。周囲を大規模な周濠が廻るが、墳丘部を陵墓地として当庁が管理しており、周濠部分は奈良市と地元水利組合等の共有地となっている。周濠は 2 重に廻ることが確認されており、これまでの調査によって外堤側についてはある程度のデータがあるが、墳丘については埴輪など遺物の採集が行われることはあったものの、具体的な考古学的情報に乏しい。さらに、本調査の目的である陵墓の保全・管理の強化という点からは、考古学的情報の収集に重点を置きつつも、墳丘に様々は影響を与えていると考えられる林相についても現状を把握する必要があった。

上記のことを踏まえて、調査の実施にあたっては平成 29 年度に入り奈良県・奈良市と数回の協議を行い、準備を行った。調査への参加者は以下のとおりである。外部研究者は考古学研究者とともに森林生態学や造園学の研究者に参加いただき、地元自治体からは、埋蔵文化財担当の専門職員に参加いただいた。

(外部研究者)

公益財団法人大阪府文化財センター (考古学)	理事長	田辺征夫 (奈良市文化財保護審議会会長)
京都府立大学文学部 (考古学)	教授	菱田哲郎 (奈良県文化財保護審議会委員)
大阪市立大学大学院理学研究科 (森林生態学)	准教授	名波 哲
奈良県立大学地域創造学部 (造園学)	准教授	井原 縁 (奈良市文化財保護審議会委員)

(奈良県)

教育委員会事務局文化財保存課記念物・埋蔵文化財係	主査	北山峰生
県立橿原考古学研究所調査部調査課調査第 1 係	係長	米川仁一
同 上 調査第 2 係	係長	青柳泰介
同 上	研究員	前田俊雄

(奈良市)

教育委員会教育総務部文化財課埋蔵文化財調査センター	所長補佐	鐘方正樹
同 上	記念物係長	森下浩行
同 上	主査	池田裕英

(所属・肩書きは調査実施時のもの)

当庁は、陵墓課陵墓調査室の清喜裕二と加藤一郎が調査を担当した。また、調査の準備・実施にあたっては畝傍陵墓監区事務所から多大な協力を得た。

## (2) 調査の経過

調査は、平成 30 年 11 月 12 日 (日) ~ 14 日 (火) までの 3 日間で行った。各日の内容は以下のとおりである。

11 月 12 日 (日) 晴れ 清喜・加藤現地入り。明日の調査に備えて、平成 21 年度小奈辺陵墓参考地事前調査の際に周濠の周回道路に設置した 3 級基準点から、宇和奈辺陵墓参考地内にレベル移動を行った。合わせて、墳丘内に設置されている探求標等の所在確認を行った。

11 月 13 日 (月) 晴れ 外部研究者と地元自治体職員の参加を得て、宇和奈辺陵墓参考地の墳丘外表面調査を実施。午前中に、ボートを使用して濠側から墳丘の現状、特に墳丘裾の状況を観察。午後には、墳丘内を踏査。踏査終了後、奈良市埋蔵文化財調査センター講座室を会場に、調査結果の検討会議を行う。

11 月 14 日 (火) 雨 あいにくの雨天であったが、地元自治体からの調査参加者の協力を得て、墳丘第 1 段テラス面のレベル確認を行い、その後には後円部西側の第 1 段テラス面付近を中心に断面図を作成した (第 29 図)。また、最後に第 30・31 図に掲載した埴輪の採集を行い、調査を終了した。

なお、調査の準備段階では天候に恵まれていたこともあり、濠水の利用による水位の低下で墳丘裾の観察ができるころまで落水が進んでいた。しかし、直前の台風や降雨等の影響による増水で調査時点では裾が水没してしまったため、別の機会に写真撮影などを行った。 (清喜)

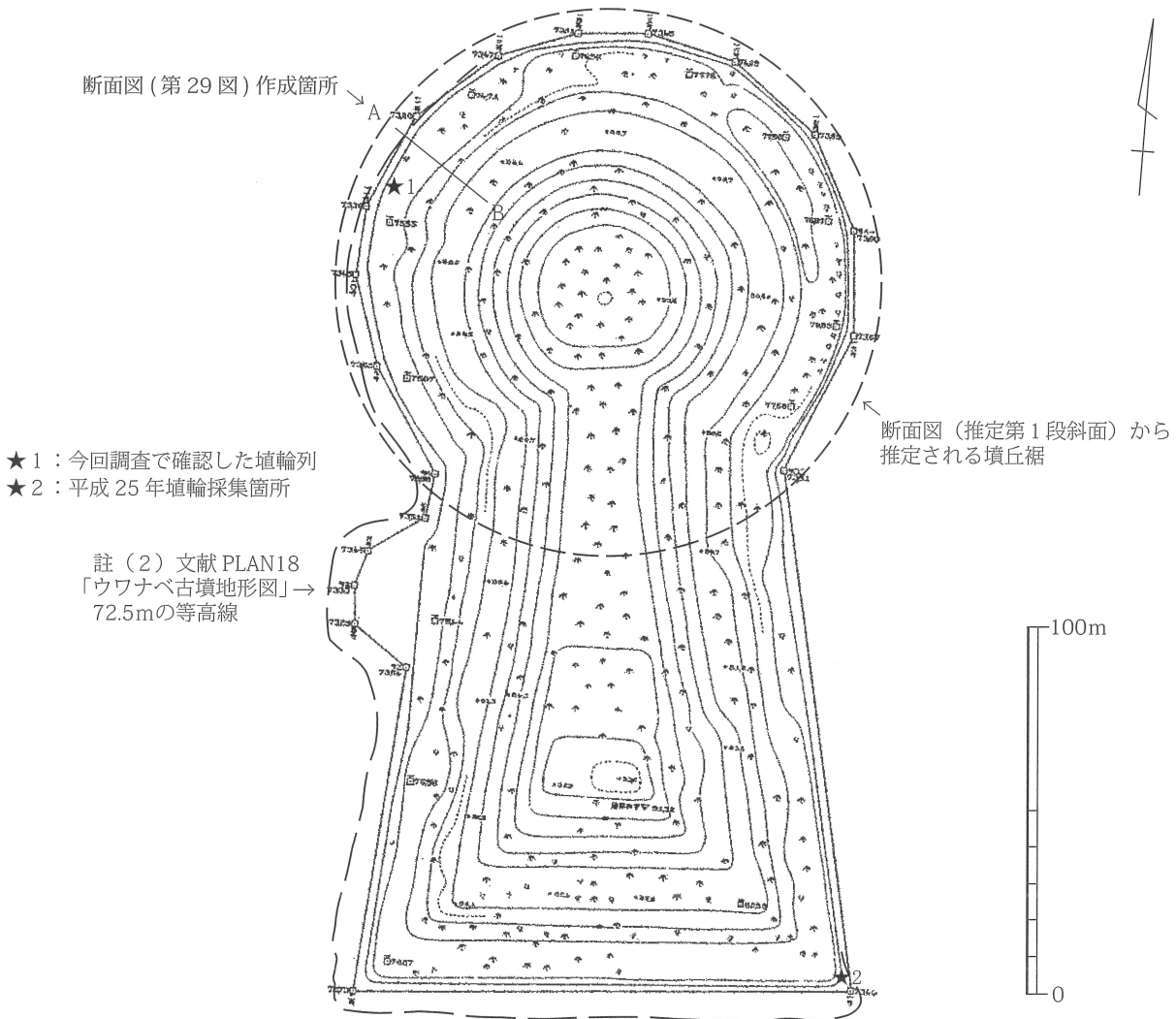
## 2 調査の所見

踏査は、調査のために後円部に設置した仮設橋を利用して墳丘に入り、等高線の変化や遺構・遺物の状況などに注意しながら反時計回りに第1段テラス面上を中心に観察を行った。必要に応じて墳丘上部についても観察を行い、遺構・遺物と林相の状況を確認した（図版22）。

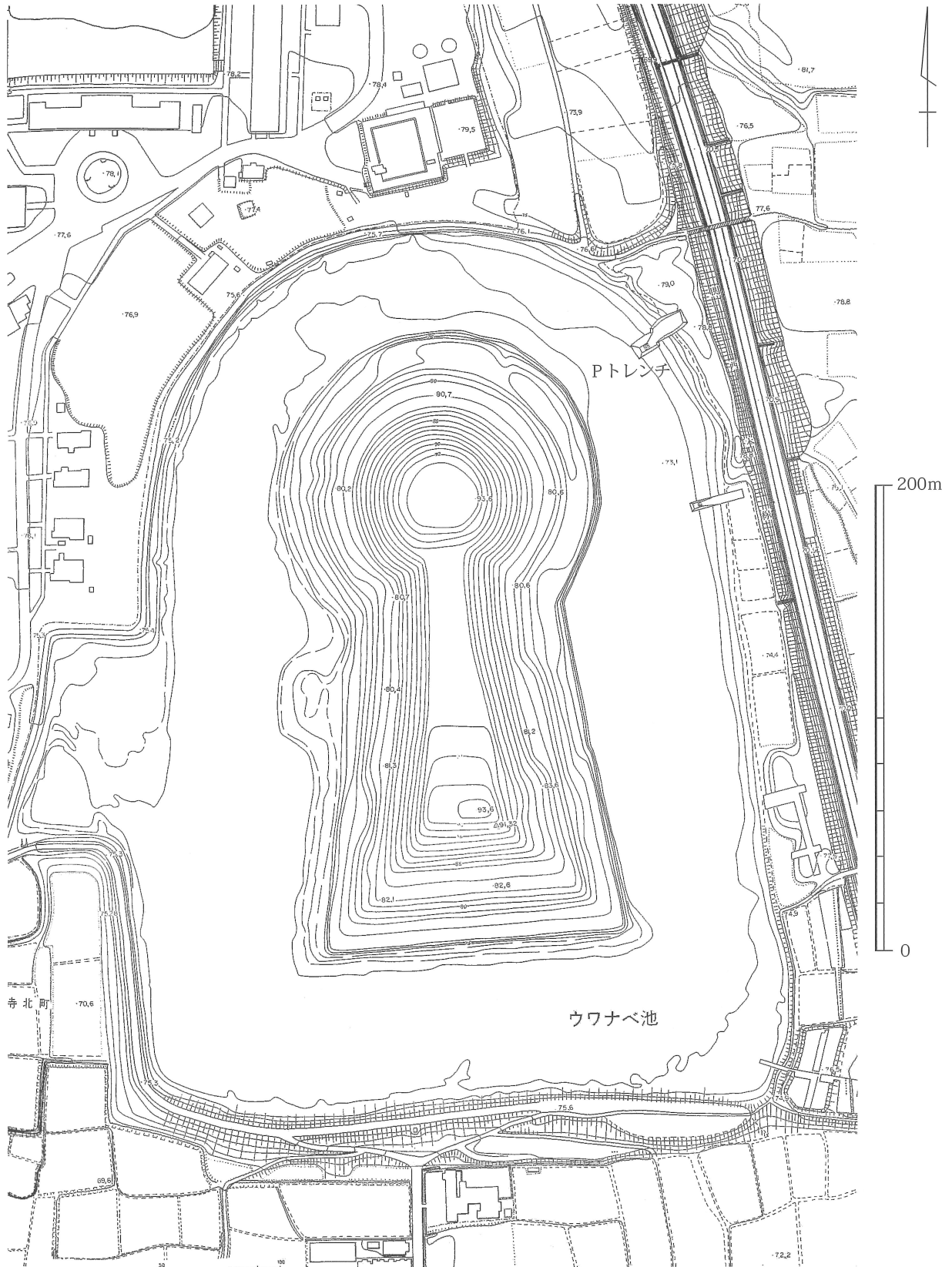
### （1）墳丘の状況

本参考地の墳丘には、2種類の測量図がある<sup>(1)</sup>。ひとつが帝室林野局作成の陵墓地形図（大正15年測量、昭和2年製図）である（第26図）。測量年次が古く、外堤部分を含めてより築造時に近い様相が記録されるが、等高線は2m間隔であり細部地形の読み取りが難しい。もうひとつが奈良国立文化財研究所（以下、奈文研）により作成された地形図である（第27図）<sup>(2)</sup>。等高線間隔は1mとなっており、陵墓地形図と比較して地形の判読を行いやすくなっているほか、造出についても等高線が入っている。また、白石太一郎氏により周濠の検討が行われて、断面模式図が示されている（第28図）<sup>(3)</sup>。

**後円部** 第1段テラス面は、陵墓地形図作成時点で既に高低差が認められる。後円部の東半分の範囲と主軸の西側約20m付近までは、77m付近に平坦面が認められる。この高い平坦面は後円部の西半分については徐々に高さを減じて、第26図に示した断面図作成箇所や埴輪列確認箇所付近においては、標高約75mできれいに高さが揃う。標高77m付近と75m付近の平坦面は、観察の結果からは明らかに様相が異なる。濠際で埴輪列が認められることから、本来の平坦面が75m付近にあることは明らかである。77m付近の平



第26図 宇和奈辺陵墓参考地 陵墓地形図 (1/2,000)



第27図 宇和奈辺陵墓参考地 測量図 (1/2,500)  
 [出典] 註(2) 文献 PLAN 18「ウワナベ古墳地形図」を引用 (一部改変)

垣面は凹凸や不規則な斜面などが認められることから、後世の人為的な盛土によって形成されたと考えられる。

先述のとおり、後円部では、北西部において墳丘裾から第2段テラス面付近までの断面図を作成した。現地の観察から、一部流土の堆積が認められるものの第1段テラス面、第2段斜面、同テラス面は良好な状態を維持している。埴輪列は、現状では実際の墳丘裾がえぐれた場所に、やや落ち込んだような状態で数個体が確認できた。現状は墳丘裾であるが、陵墓地形図に位置を落とすと墳丘の内側にあたることから、陵墓地形図作成後に濠水の波浪の影響により墳丘裾が削られた結果と考えられる。付近一帯では埴輪片が多く認められており、後述する埴輪も同じ範囲で採集したものである（第26図★1、第29図）。

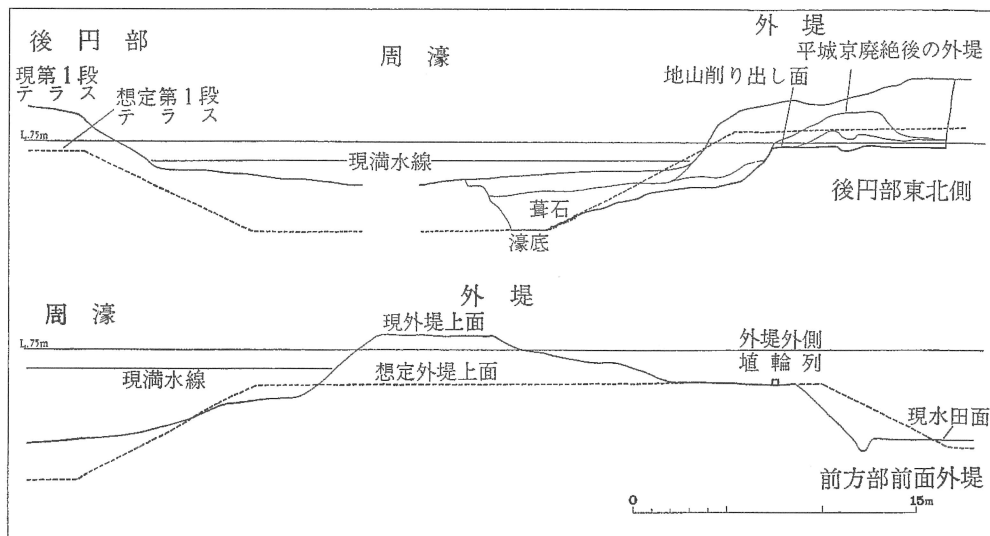
後円部頂上平坦面は、中央付近にわずかな高まりが認められるものの、現状からどのような性格のものかは判断しがたい。2段目、3段目についてはおおむね良好な状態を保っているといえる。

**造出** 調査時には完全に水没した状況であった。1969年に実施された外堤ほか周辺の調査の際には、境界線の外側で土師器・須恵器・土製品が採集されたことが知られている。奈文研作成の測量図から読み取る限り、造出上面は最高点が73.5m～74mの間にあり、72.5mのラインが平面形をよく表している（第26図）。あわせて現在は明瞭な造出上面が認められず、周濠に向かって緩やかに下っていく状況である。後円部第1段テラス面の高さが約75mであることから、推定される造出上面との比高は1m前後であったと考えられる。

**前方部** 前方部は、現地観察の結果では、西側面において第1段テラス面の幅がかなり減じていることが確認された。また、第2段斜面の流土の影響により、平坦面を明瞭に観察できる場所は限られている状況であった。東側面は比較的良好な状態であることから、後円部第1段テラス面（約75m）との比高を確認した。前方部東側面南端で確認されている埴輪列で約76.5mの数値が得られたので、比高は約1.5mとなる。第1段テラス面は、前方部に向かって徐々に上がっていく構造になっていると考えられる。2段目・3段目については、陵墓地形図に示された等高線のとおり数ヶ所流土が認められるが、全体としては良好な状態にあると考えられる。また、鞍部において、埴輪列の可能性のある埴輪片の散布地を1ヶ所確認した。

第29図で推定される後円部の裾を第26図に示した。奈文研作成測量図での造出からくびれ部付近の濠内等高線の形状と比較的整合しているようにみえるが、第1段斜面の角度が推定である点、第1段テラス面濠側の傾斜変換点が陵墓地形図作成時点の位置であるという点から、あくまで参考程度にとどまるものと理解いただきたい。

なお、陵墓地形図では要所に高さが記入されているが、後円部頂上平坦面と前方部頂上平坦面では、ほぼ同じ高さであることが示されている。



第28図 宇和奈辺陵墓参考地（ウワナベ古墳）周濠（後円部東北側・前方部前面）断面模式図（1/400）  
 【出典】 註（3）文献 第7図から転載

## (2) 林相の状況

本参考地の林相が、築造後どのように形成されたかは不明である。いずれにしても築造当初は、葺石や埴輪列が施された築山であったことから、当然古来より周辺にあった植生とは形成過程が異なるであろう。さらに、途中で人の手が入る機会も多かったと考えられるため、その履歴はそれなりに複雑であることが推測される。現在辿れるのは、大正 15 年に陵墓地形図作成のために測量された時の林相からであり、記号の分布からは大半がマツで占められている。そのほかに潤葉樹（広葉樹）の記号が散在する。マツはアカマツと考えられ、本参考地の航空写真などからも確認できるが、時期を経るにつれて徐々に減少している様子が見て取れる。以下は、現地観察を行った際に樹林関係の研究者からいただいた所見を、調査担当者が整理・記述したものである。

**林相の特徴** 樹種としては、アラカシ、シャシャンボ、カナメモチ、ソヨゴ、サカキなどの常緑広葉樹が目につくものとして確認された。林の状態としては若い植生となっている。周辺には道路を挟んで里山が広がっておりコナラが中心の林が広がるが、本参考地はその段階を通り越して、常緑のカシなどが中心となる常緑広葉樹林に置き変わっていることから、林相の移り変わりの段階としては、ほとんど最終段階に近いと考えられる。常緑樹の中でもソヨゴは若いところによくみられる樹種であり、最終段階の一手手前の状態にあると考えられる。いったん過去の林がなくなった後、現在の林がスタートしているので、種数としては多くはなく、20 種類には届いていない。これからは、墳丘の中がうっそうとした暗い状態となり、暗いところでもアラカシ、サカキは芽生えて、耐えて生き抜く樹種であるので、大きな台風などによる破壊がない限り、この状態の継続が予測される。

また、土壌はふかふかで柔らかくスポンジのような状態である。腐葉土の層が形成されていると考えられ、周辺の森林では 10cm 程度下で粘土・砂・礫の層が出てくるが、本参考地では 20cm 以上の厚みがあると考えられる。水分をよく吸収する性質をもつ。

**管理上の視点** 腐葉土の表面に樹木の細根が張り巡らされていて、腐葉土が流れないように握っている状態にあると考えられる。もし樹木がなくなって根も枯れてしまうと、柔らかい腐葉土は雨水などで流されやすくなる。一方で、樹木の根が地中の遺構に影響を及ぼすことは考えられる。樹種によって、深くまで入り込むもの、表層でとどまるものと違いがあるが、本参考地に生えている樹種は、地下の遺構や遺物に到達する可能性があるため、樹種による伐採の選別をしてもそれほどの効果は期待できないと考えられる。

大きいものを切れば表層の土壌が流れ出すおそれがあるので、大きい樹木を少しずつ切って、残った小さい樹木の細根を張り巡らせて集団で土を握っている状態を維持させながら管理する方法が考えられる。

現在確認できる樹木は、カシもサカキも大きくなると、現在の 2 倍程度まで成長する。樹種構成は変わらないが、まだまだ大きくなり、大きくなると根も深くなる。

裾周りの樹木に関しては、かつてのアカマツ林の痕跡といえるマツが残り、太陽の光を求めて 2～3 本斜めに伸びている状況にある。また、マツだけでなくいずれの木も、太陽のある濠の方に斜めに幹が伸びている。墳丘の中は密閉状態となっているため樹木は光を求めており、枝張りも外側に集中している状態にある。裾にある樹木は、濠の方に押されて比重がかかっている状態にあるため、濠水の影響で下がえぐられると、樹木とともに根が抱え込んでいる部分の土が塊で崩れて落ちることになる。管理上樹木の伐採を行うときには、内側を日当たりの良い状態にするか、裾の傾斜を整えるような措置が必要と考えられる。

本参考地一帯は風致地区であるが、風景になじんでいる状態にある。林相としては最終段階の一手手前の状態であるので比較的安定していると考えられるが、その中に混じっているスギとヒノキが弱っており、それらが枯れて後々倒れる可能性がある。倒れると根元の土も持ち上がると考えられるため、現在の状況の中で、一定のレベルの大きさのものにマークしておくと同時に、スギ、ヒノキを筆頭に弱っている樹木をリストアップして処置をしておいた方が安全と考えられる。段階的に処置をする中で残った樹木は育っていくが、現在生えている樹木の年齢に差はないので、大きくなりやすい樹木は重点的に処置していくことで将来的に倒木の危険を減らせる可能性がある。

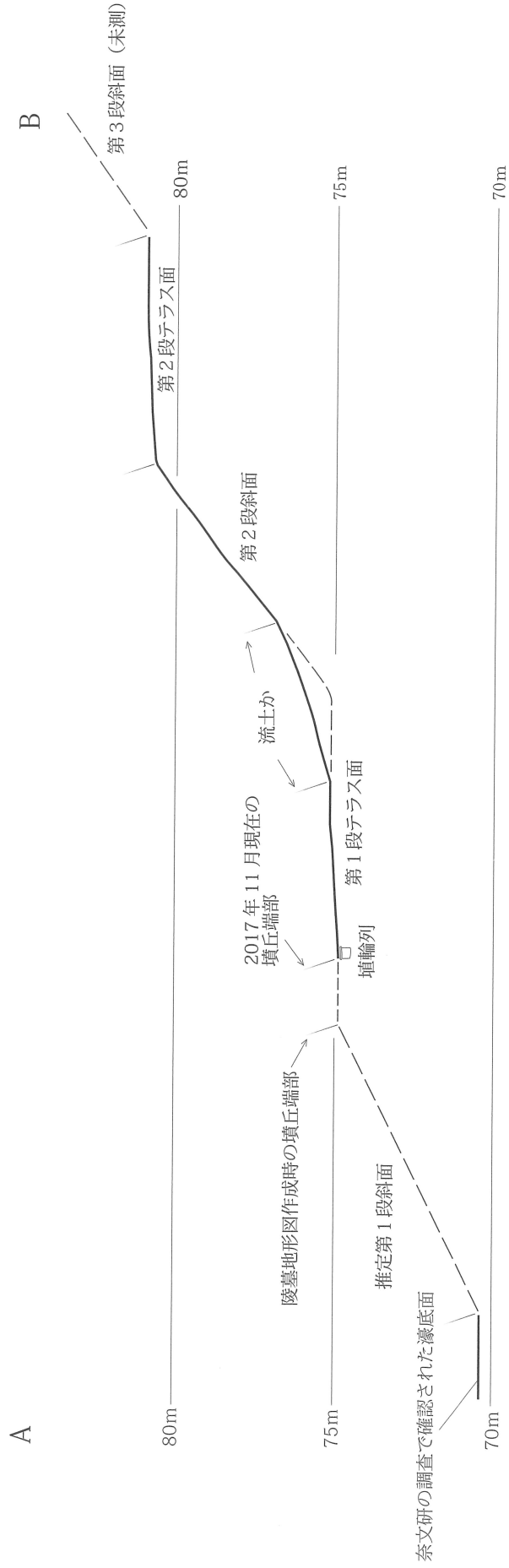
(清喜)



後円部北西側第1段テラス面  
実測の状況



後円部第1段テラス面 調査の状況



※推定第1段斜面：奈文研の調査（註（2）文献 Pトレンチ）で確認された外堤斜面（約26度）を参考に推定した斜面

第29図 宇和奈辺陵墓参考地 後円部北西側断面図（第1段テラス面～第2段テラス面）及び第1段斜面推定図（1/200）

### 3 採集遺物

#### (1) 本調査での採集品

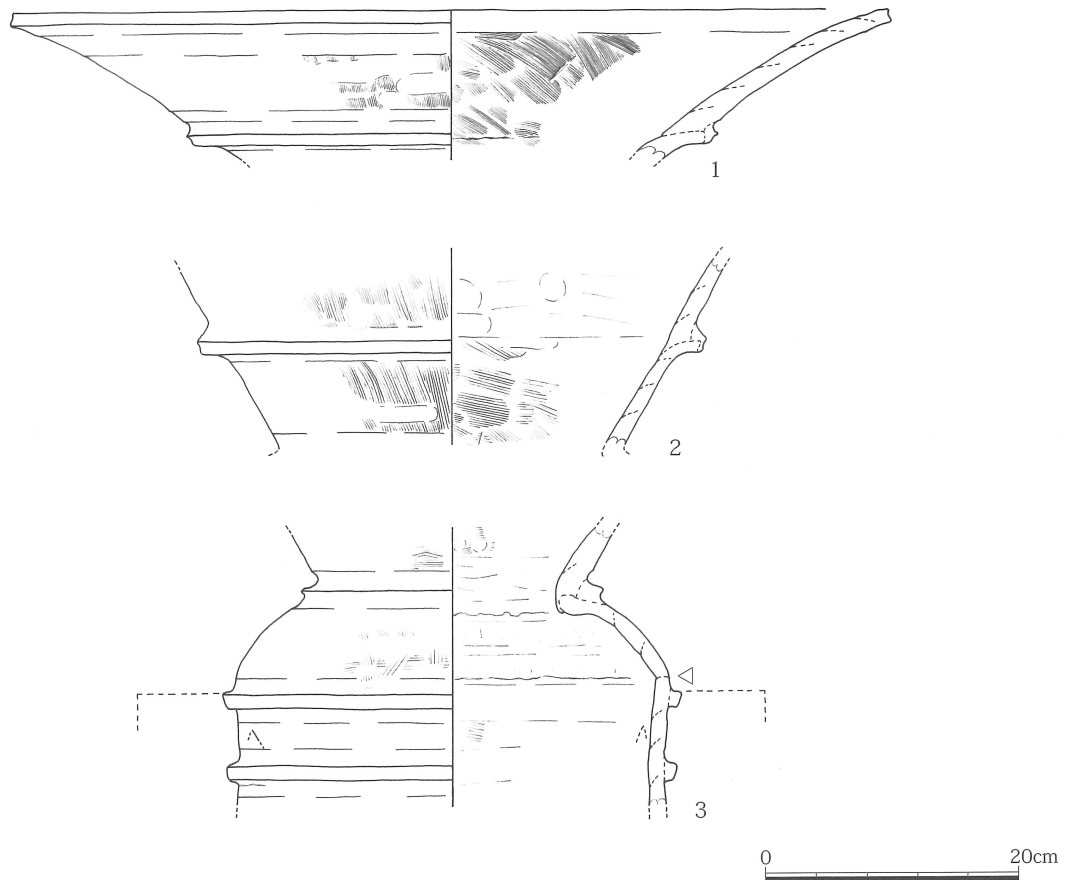
**埴輪** 今回の調査で採集された埴輪片は計 30 点であるが、接合したものや接合しないものの同一個体と認定できる破片も多く、ここで報告するのは 6 点である（第 30・31 図）。そのうち、1～3 は朝顔形埴輪となることが確実な資料である。また、4・5 は口縁部の破片であり、円筒埴輪となることが確実といえる（図版 23-2）。6 は底部の破片であり、円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪となる可能性がある。

今回採集された資料の焼成方法は、いずれの破片にも黒斑がみられないことから、窖窯による焼成であったと判断される。焼成の仕上がりは、非常に堅緻なものもあれば（1・2 など）、軟質なものもみられる（4・6 など）。なお、赤色顔料の塗布と焼成の先後関係について判然としない資料が多いものの、3 については焼成前に塗布していることが確実といえる（図版 23-1）。

胎土は、いずれの資料も大きな差異はみられず、やや密であり、直径 5 mm 以内のチャートや白色砂粒などを含んでいる。色調は黄白色から黄橙色のものが多い。

以上が、今回の採集品の全体的な傾向であり、以下では個別の資料について特徴を記しておきたい。

すでにふれたように、1～3 は朝顔形埴輪である。1 は二次口縁部を含む破片で、口径は復元で 70 cm であった。2 は一次口縁部から二次口縁部にかけての破片である。1・2 ともに、一次口縁部を通常的口縁部のように形成したのちに、二次口縁部を積み上げ、一次口縁部と二次口縁部の境界に突帯を貼付していることが断面の観察からわかる。



第 30 図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図 (1) 朝顔形埴輪 (1/6)

3は鱗付朝顔形埴輪であることが判明した資料である。同様の資料は以前にも本誌で紹介したことがある<sup>(4)</sup>。円筒部上段から頸部にかけての破片で、円筒部の最上段における突帯間隔が、通常の突帯間隔にくらべて狭くなるいわゆる極狭口縁の形態を反映したものであることがわかる。この間隔の狭くなる段には、小さな三角形の透孔が複数穿たれていたことを確認できる。

4は円筒埴輪の口縁部を含む破片で、鱗が付属していたことを確認できる。口径は復元で43cmであり、口縁部高は5.5cmである。最上段には小さな三角形の透孔が穿たれている。その下の段には長方形の透孔を穿っていたことが、同一個体と考えられる接合しない破片から推測される。この段の外表面調整には、静止痕をとまなうヨコハケがみられるものの、段の全体が残存しているわけではないため、ヨコハケの種類を確定するにはいたらない。

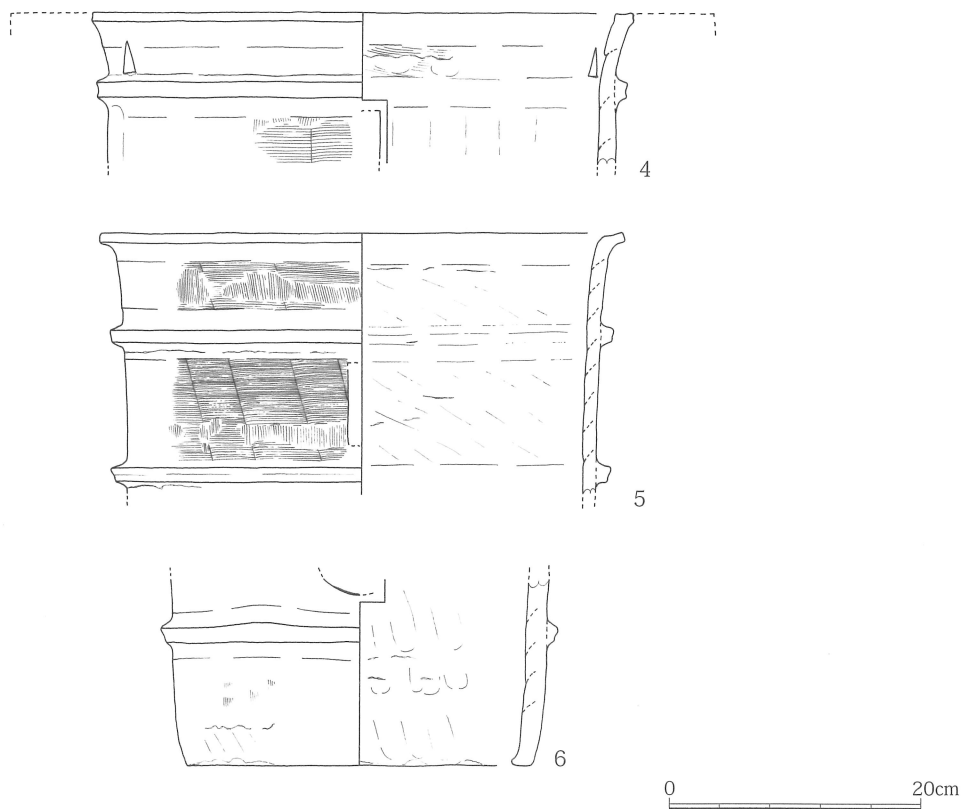
5は円筒埴輪の口縁部を含む破片であるが、鱗が付属するかどうかは不明である。口径は復元で41.5cm、口縁部高は7.5cm、突帯間隔は約11cmである。最上段の下段には長方形の透孔がみられる。外面の最終調整は、やや傾いているもののBc種の範疇で理解されるヨコハケといえる。内面調整はナデを基本としている。4・5のいずれも、最上段の口縁部高が突帯間隔よりも狭くなる極狭口縁といわれる形状となっている（図版23-2）。

6は底部を含む破片であり、底径は27.5cm、第1段高は11cmである。器壁の表面は摩滅がいちじるしいものの、第1段の外表面にはわずかにタテハケが確認できる。内面調整はナデを基本とし、第2段には円形もしくは半円形の透孔が穿たれている。

以上、ここまで述べてきたように、今回の採集品の特徴はこれまでに知られている当参考地出土埴輪の様相をおおむね逸脱しないものといえる。

なお、今回あらたに気づいた点としては、朝顔形埴輪の割合が多い点をあげることができる。似たような傾向は、百舌鳥陵墓参考地や五十瓊敷入彦命宇度墓などにおいても確認できる点が注意される。何らかの指標となる可能性があるだろう。

(加藤一郎)



第31図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図(2) 円筒埴輪(1/6)

## (2) 平成 25 年度の採集品

平成 25 年 11 月に採集されたもので、位置は前方部東側の屈曲部である。南北に並ぶことから前方部第 1 段テラス面の東側面の埴輪列の南端部あたると考えられる。採集されたのは埴輪と須恵器である。いずれも転落した状況で採集されたため、特に須恵器が埴輪の中に入れていたのかなど、配列状態の詳細は不明である。以下に各資料の概要を述べる。

**埴輪** (第 32 図、図版 24～25-1) 朝顔形埴輪や形象埴輪と考えられる破片は認められず、基本的には円筒埴輪の破片で占められると判断できる。破片を整理した結果、4 個体分になると考えられる。底部が完存するものが 1 個体あるほか、残り 3 個体は接合しないものもあるが、いずれも底部の破片を含んでいる。また、各個体とも胎土は密で、径 1 mm 程度の砂粒を含むほか、大きいものは径 5 mm 程度のものも散見される。

7 (第 32 図 7、図版 24-1・2) は、底部復元径 30.8cm を測る。鱗付の個体である。胴部と底部は接合しないが、調整痕等の観察から同一個体である可能性が高いと判断した。外面は、タテハケの後 B 種ヨコハケが施されている。静止痕の間隔は 3～4 cm である。内面は、底部において左斜めに傾いたタテハケが顕著である。胴部ではタテハケの後指ナデによる調整が行われている。底部から第 1 段突帯直下までの高さは 8 cm である。透孔については不明である。色調は明黄橙色から黄白色を呈しており、胴部の破片には赤色顔料の塗布が認められる。

8 (第 32 図 8、図版 24-3・4・7) は、胴部復元径 31cm を測る。鱗付の個体であるかどうかは不明であるが、胴部突帯に接して縦方向に近接する 2 本のヘラ状工具による刻みが認められることから、鱗付の個体である可能性が考えられる。胴部と底部は接合しないが、調整痕等の観察から同一個体である可能性が高いと判断した。外面は、タテハケの後 B 種ヨコハケが施されているようだが、静止痕は不明瞭である。内面は、底部において左斜めに傾いたタテハケが顕著である。胴部ではタテハケの後指ナデによる調整が行われており、7 の個体に類似する。底部から第 1 段突帯までの間隔は不明である。円形透孔が確認できる。色調は黄白色である。赤色顔料の塗布が認められる。なお、胴部には布の圧痕、底面には棒状の圧痕が認められる。

9 (第 32 図 9、図版 24-5・6) は、現存高 16.8cm、底部復元径 33.6cm を測る。鱗付の個体であるかどうかは不明である。外面は、タテハケの後 B 種ヨコハケが施されている。静止痕の間隔は 3～4.5cm である。内面は、左斜め上に向かっての指ナデである。底部から第 1 段突帯直下までの高さは 13cm である。透孔は不明である。色調は黄白色を呈しており、同一個体と考えられる胴部の破片には赤色顔料の塗布が認められる。

10 (第 32 図 10、図版 24-8・25-1) は、現存高 24.7cm で底部が完存しており、底部径は 25cm を測る。鱗付の個体であるかどうかは不明である。外面は、タテハケの後 B 種ヨコハケが施されている。静止痕の間隔は 3～4 cm である。内面は、左斜め上に向かっての指ナデである。底部から第 1 段突帯直下までの高さは 10.5cm である。対向する 2ヶ所に円形透孔が確認できる。色調は黄白色である。残存範囲で赤色顔料の塗布は認められない。なお、底面には棒状の圧痕が認められる。

**須恵器** (第 32 図 11、図版 25-2～4) 無蓋高坏である。脚下半部の 2/3 を欠くが、全形を知りうる資料である。高さ 9.2cm、口縁部径 10.8cm、脚端部復元径 9.1cm を測る。色調は、焼成前に塗布されたと考えられる赤色顔料により、暗赤褐色を呈する。脚部内面も坏底部付近以外のほぼ全面に施されている。赤色顔料に覆われていない脚部内側の坏底部外面は、黄橙色を呈する。胎土は密である。

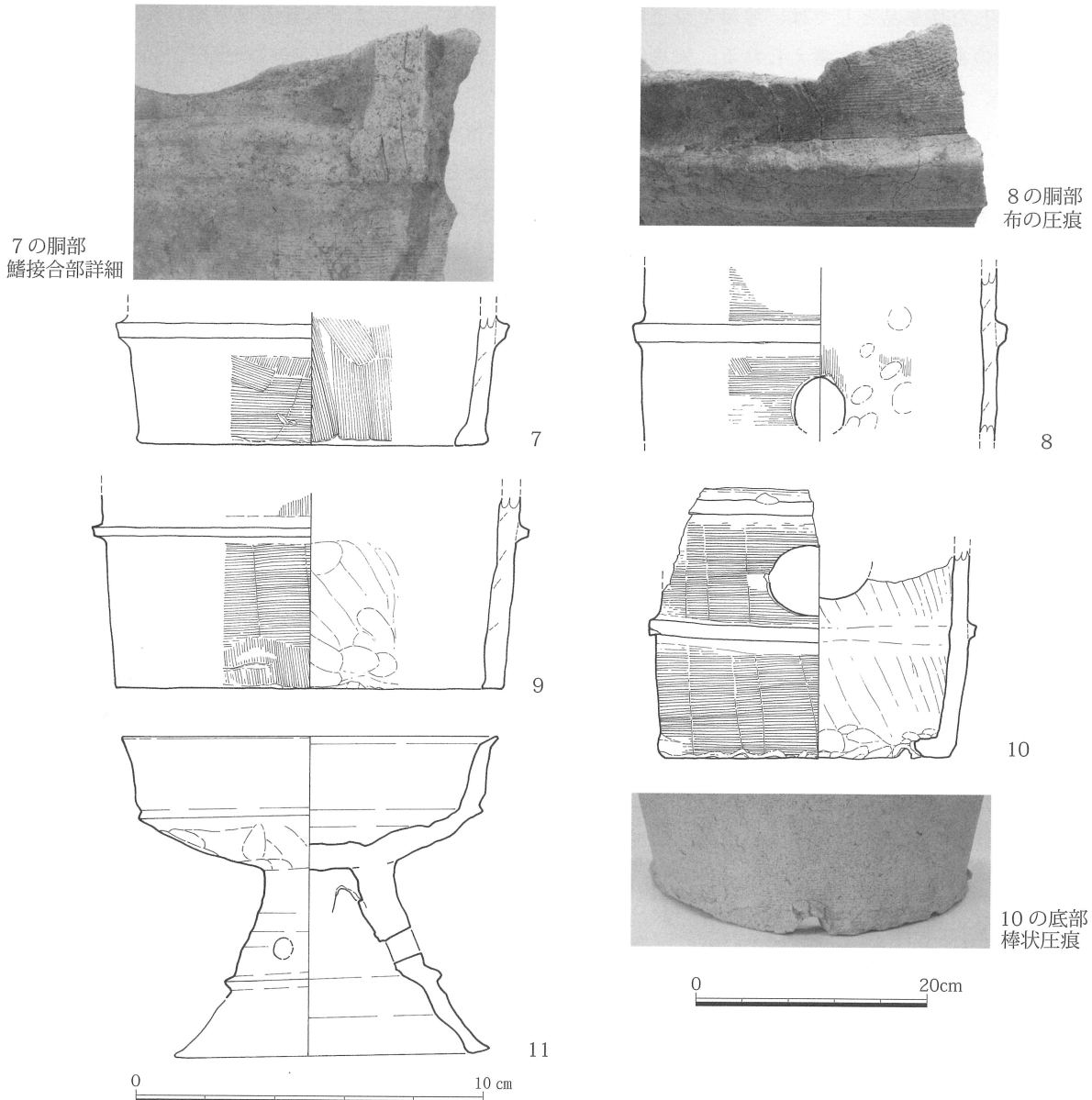
調整は、底部外面に回転指ナデが一部残るが、不定の指ナデ調整と思われる痕跡が顕著で、押圧痕やヘラケズリと考えられる痕跡も認められる。その他は回転指ナデ調整である。

坏部は、底部外面に調整痕の影響でやや凹凸が目立つ。立ち上がりへの屈曲部には明瞭な突帯と沈線が形成されている。立ち上がりは直線的だが、端部でわずかに外反する。内面は、粘土帯の痕跡が顕著である。

脚部には、貫通する直径 6～9 mm の円形透孔が 3ヶ所に施されている。透孔の下には突帯が廻る。脚部全体としては緩やかに外反している。

採集された須恵器高坏は、全体として従来本参考地において知られていた須恵器と同様の特徴をもつといえよう<sup>(5)</sup>。

(清喜)



第32図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図(3) 円筒埴輪(1/6)・須恵器(1/2)

### まとめ

本参考地における外表面調査の結果、墳丘上部については陵墓地形図作成時点と比較して、大きく変わることはなかったといえる。しかし、墳丘裾については、濠水の波浪の影響により一定幅の後退が認められ、これは埴輪列が所々で確認されたことや埴輪片の散布などに端的に表れているといえよう。今回の知見では、埴輪列が具体的にテラス面のどの辺りに位置するかという点までは明らかにできなかったが、将来的に調査を実施する際に参考となる情報といえる。

後円部第1段テラス面において大規模な盛土がなされていると考えられる点については、これまでの陵墓の調査でしばしば同様の盛土が確認されている。多くは濠内堆積土が浚渫土として墳丘上に盛り上げられたものであった。後円部の北側が濠内堆積土のもっとも厚い場所のひとつであることから、その可能性が高いと考えられるが、現在は推測の域をでない。盛土の時期を推定できるような採集品もないが、本来のテラス面がバックされた状態にあると考えられるため、遺構の状態などは第1段テラス面の中では良好であると考えられる。

今回報告した採集品としては、埴輪と須恵器がある。いずれも、これまで本参考地で知られていた資料の特徴と同様のものであると考えられる。須恵器については、脚部の一部を欠くものの全形が捉えられる資料である点で、これまで破片資料が中心であったものに新たな知見を加えるものとなった。

林相については、周辺地域と比較して樹種の少ないことが指摘された。樹林としては比較的安定している一方で、スギ・ヒノキについては弱っているものが見られたことから、他の大きく育つ樹種も含めて注意深く経過観察を行う必要がある。また、表面の腐葉土の厚いことが指摘されたが、葺石などの遺構を保護している側面があり、樹林の管理はこれらを維持することとも連動していることから、そのことも踏まえて適切に管理していく必要がある。

近年は、規模の大きな台風などにより、日本列島各地域に大きな自然災害の及ぶ事例が増える傾向にある。今回の調査結果は、本参考地における今後の考古学的な調査計画の検討のほか、保全・管理など自然災害への対応を考える上で重要な情報であり、今後も必要に応じて蓄積していく必要がある。（清喜・加藤）

#### 註

(1) 二つの測量図を同縮尺に合わせて重ねると、多少大きさ（長さ）が異なるようである。作成年代の違いもあるため、何らかの理由によるのであろう。後円部については重なり具合が良好であるため、主に前方部前面付近のズレが顕著となっている。

よって、第 26 図では第 27 図の等高線を一部重ねているが、後円部を重ね合わせた状態での位置になるため、上述のとおり、前方部前面付近の位置関係はズレが大きくなっている点に注意が必要である。

(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 VI 一平城京左京一条三坊の調査一』（奈良国立文化財研究所学報第 23 冊）、1974 年。

(3) 白石太一郎「古墳の周濠」『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』、角田文衛先生古稀記念事業会、1983 年。

(4) 土生田純之・清喜裕二・加藤一郎「宇和奈辺陵墓参考地採集の埴輪について」『書陵部紀要』第 57 号、宮内庁書陵部、2006 年。

(5) 註（2）文献に同じ。



1 墳丘裾の調査状況（1）（西から）



2 墳丘裾の調査状況（2）（南から）



3 墳丘内調査への参入状況（北から）



4 墳丘の状況（1）造出から後円部西側（南から）



5 墳丘の状況（2）造出（西から）



6 墳丘の状況（3）造出付近第1段テラス面（南から）



7 墳丘の状況（4）前方部東側面（南から）



8 墳丘の状況（5）前方部前面（東から）



1 朝顔形埴輪



2 円筒埴輪



1 埴輪 7 (胴部外面)



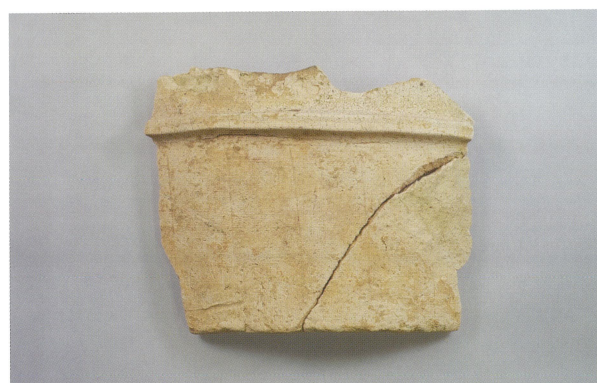
3 埴輪 8 (胴部外面)



2 埴輪 7 (底部外面)



4 埴輪 8 (底部外面)



5 埴輪 9 (底部外面)



7 埴輪 8 (底部内面)



6 埴輪 9 (底部外面ヨコハケ拡大)



8 埴輪 10 (底部内面)



1 埴輪 10 (全景)



2 須恵器高坏 (全景)



3 須恵器高坏 (坏部内面)



4 須恵器高坏 (坏部外面)